

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 日本国語教育学会

（代表者 倉澤栄吉 会員数 約4,000名）

T E L 03-3941-3420

1 前 文

(1) 現代文分野

高等学校学習指導要領における3領域中、依然として「読むこと」が中心になっており、「話すこと・聞くこと」「書くこと」が反映されたものとはなっていない。設問も、従来からの部分解釈や心情理解が主であり、PISA調査や文部科学省の全国学力・学習状況調査などとは、全く質の異なるものとなっている。このあたりの整合性をどのように求めるのか、抜本的検討が必要ではないか。

(2) 古典分野

古文・漢文とも文章量が増えた。どちらもさほど難解ではないが、ともに注も多く、例年の問題より解答に時間がかかったものと思われる。内容についてはおおむねよく工夫されており、教室での古典学習の成果を多角的に見る出題が多く、全体として良問であった。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

第1問 話題は親しみやすいものだが、筆者の見解がかなり独善的であり随想的な文章である。抽象度、用語、内容とも、「国語総合」の範囲を超えている。論拠の明確な、読解力を測るにふさわしい文章を出題されたい。

問1 本学会が繰り返し指摘しているところであるが、実際に漢字を書かせる形式での出題を強く求めたい。また、設問では音読みのみを問うており、漢字力が正しく判定できるのか疑問である。訓読みの選択肢を用意するなどの工夫が欲しい。

問2 読解の導入として問うには、不適切ではないか。本文全体を読んで答えると④を正解と考えた者もいただろう。③を正答とするなら、問い方を変えるなり、④の内容を変えるなりするのがよいだろう。

問3 問うべき箇所であるが、選択肢が練れておらず単純なため、容易な問いとなっている。

問4 傍線部Cより後の論の構成を踏まえることで正解が導ける、難しい問いである。

問5 正答以外の選択肢の内容は明らかに誤りである。しかし、正答の「連帯感に基づく」は、出題者の解釈の一面を述べているにすぎないのではないか。

問6 「文章の特徴」を問うているにもかかわらず、①～④は部分にすぎず、設問文と選択の内容が合致しているとは言い難い。事例・引用の役割を問うのは必要なことだが、「文章の特徴」を問うなら、⑤⑥のような文章全体に関するものにそろえた方がよいだろう。

第2問 舞台設定が、受験者になじみのあるものとは言えず、状況が分かりにくい。設問が「彼の心情理解に偏っているのは、この部分を問題文としたことに起因するものと言える。

- 問1 問われている語句が古めかしく、高校生レベルのものとして必ずしも妥当なものとは言えない。「しくはなし」「周章していた」など、もっと問うにふさわしい語句が、問題文中にはあるように思う。
- 問2 導入として妥当な問いであるが、容易である。
- 問3 「不思議に親密な思い」を問うこと自体が難しいのではないか。正答⑤の「いとおしく」は、言い尽くしたものとなっていない。部分的には、③の終盤の「父を意外なほど身近に感じた」の方がふさわしい。
- 問4 選択肢の作り方が単純で、最後のフレーズを比べるだけで答えられる。
- 問5 「なぜ」という問い方では誤答を招きかねない。内容説明として問うのがよいだろう。
- 問6 問いの意義には賛成であるが、第1問と同様、全体的なものとして選択肢を用意したい。
- 第3問 文章量が例年より長くなり、注も14個となって、かなり多くなった。出典は室町時代の擬古物語で、文章自体は読みやすいものの、歌と人物関係をきちんと把握しなければならず、女房たちが主人の指示に反して手紙を取り次がない理由が分かりにくいなど、やや時間のかかるものであった。しかし、教室での古文学習の成果を問う問題としては適切だったと言える。
- 問1 (ア)～(ウ)の取り合わせはバランスの良いもので、基本が分かっているだけでよい。(ア)は特に基本的で、最初の問いとしては必要なものである。(イ)は慣用的によく出てくる表現で、適切なものである。(ウ)は多少の文脈理解が必要で、後の理解にも役立つ良問である。
- 問2 オソドックスな出題である。教室での古文学習の成果が試されている。敬語は文脈理解上^{ひっす}必須なものなので、数年に一度は出題してほしい。基本的な読解力を試す問いとして適切と言える。
- 問3 和歌に関する設問はよい。選択肢の内容が①②と③④⑤でややアンバランスで、和歌の修辭法の知識がある生徒には易しい。なお、「適当でないもの」を問うのは望ましくない。
- 問4 直前の文脈をとらえた上で答える問いとしてよい。必要な問いである。
- 問5 教科書学習のあり方をよく踏まえていてよい。心情から事柄を問うなどが含まれており、良問である。
- 問6 内容合致問題は必要である。本文と注を一体としてよく読むことが求められており、①と⑤の判別はやや難しいであろう。正答の「一家を榮えさせる好機」という表現にやや飛躍があるものの、授業での教師による背景説明などに想像を膨らませられる点で、日常学習の成果が試されていて適切である。なお、選択肢の並び順を本文の順序どおりにするよう配慮が欲しい。
- 第4問 本文が長い。追試験は短かったので、平等性を考えると若干問題がある。長いがゆえに注も多いが、これは理解のために必要な注であり、注とともに読めばさほど難解ではない。漢文学習でよく出てくる逸話を取り上げていて好ましい。
- 問1 熟語について考えるのは必要なことであり、(1)(2)ともに良問である。
- 問2 配点の軽重に問題がある（後述）。問いの内容は明快でよくできている。「而」の判別（順接か逆接か）を含むのは、よく練られていて好ましい。
- 問3 主語判別問題はあってもよいが、選択肢の内容にもう一工夫欲しい。(ア)が分かれば、あとは(イ)だけで答えが決まってしまう。

問4 新傾向問題である。1文1文の吟味をする中で、漢文の基本知識を文章全体に結び付けて問うもので、創意工夫の見られる良い出題。ただし、多少無理をしているようで、選択肢の整合性に若干問題もある。④などは明らかすぎる誤答である。

問5 内容理解が必要なもので、丁寧に読めばきちんと正解の出る良問である。6択にして、③の前半と同じ表現の選択肢があってもよい。

問6 配点10点は多すぎる。1問で漢文全体の2割を占めてしまうのはいかがなものか。漢文の配点で毎年のように見られるが、考慮すべき点である。例えば、問1は古文（第3問）の語い問題（問1）とのバランスを考えると、ともに5点（又は4点と5点）でよく、その分は問6で8点（または9点）にすべきであろう。正答選択肢も、「安易に」などはやや微妙であろう。本文から導き出しやすい表現にしてほしい。